

KOBUNSHA BUNKO

佐藤愛子

躁病そうびょうのバイキン



光文社文庫





光文社文庫

躁病のバイキン

著者 佐藤愛子

昭和60年5月20日 初版1刷発行

発行者 大坪昌夫
印刷 堀内印刷
製本 明泉堂

発行所 株式会社 光文社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241 (代表)

振替 東京 6-115347

© Aiko Satō 1985

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70150-7 Printed in Japan

光文社文庫

そう びょう
躁病のバイキン

佐藤愛子



光 文 社

躁病のバイキン 目次

躁病そうびょうのバイキン

9

樹座きざ公演顛末てんまつ記

33

自演自作

53

禁じられた遊び

77

バンバンザイの二人

111

幸福の情景

153

多助たすけのタイコ

179

二階のスーちゃん

213

解説

帯おび正子

245

躁病のバイキン

躁病そうびょうのバイキン

1

子供の頃、病気の中で何が怖いかというと、まず一番がハンセン氏病であった。

それから肺病、チフス、コレラも怖かった。天然痘てんねんとうというアバタの残る怖い病気もあり、天然痘患者が出たという家の前は、学校の行き帰りにうつらぬよう、息を詰めて走ったものである。

その頃、私の家には三人の女中がいたが、彼女たちはなぜか、「怖い話」をするのが好きであった。今のように週刊誌もテレビもない時代であるから、夜なべ仕事をしながらの話は、お化けの話とか、狐きつねや狸たぬきに欺だまされた話とか、怖い目に遭あった話のほかには、怖い病気の話でもしているよりしやうがなかったのであろう。

肺病とチフスならどっちがましか、という話題になり、一人は高熱でハゲ坊主になるチフスよりも肺病の方がマシだといい、もう一人は徳富蘆花とくとみろかの『不如帰ほととぎす』を持ち出して、浪子なみこは肺病ゆえに姑しゅうとにうとまれた、私の村では肺病と聞くと村中が白い眼で見る、肺病は血を吐くから

いやだといい、そして必ずこの歌を歌うのであった。

「武男が戦争センソウに行くときは

白シロい 白シロい まっ白い

ハンカチ ふりふりねえあなた

早はやく 帰かえってちょうだいね

シュッシュ ポップと出る汽車は

武男と浪子の別れ汽車

ふたたび帰らぬ汽車の窓

啼なーいて血を吐く ほととぎす」

と歌って、

「肺病は怖い、ほんまに怖いわ……」

と結ぶのであった。

そのうちに必ず話題は癩病らいび（当時はハンセン氏病をこう呼んだ）の話になる。

昔、野口男三郎おさぶろうという男がいた。

その男の愛人が癩病になった。

癩病は不治の病と思われていたが、人間のお尻の肉を黒ヤキにして飲めば治ると聞いて、兄を殺してそのお尻の肉を切り取って黒ヤキにして飲ませた。

それが発覚して、男三郎は牢屋に繫^{つな}がれ、そこで歌った。

「ああ 世は夢か

幻か

獄舎にひとり

思い出の

夢より覚めて

見渡せば

あたり静かに

夜はふけて

月影あわく

窓にさす

ああ この月の

さす影は

置く露深き

青山に

静かに眠る

兄君の

………」

一人が歌いはじめると、他の二人もそれに和し、歌は蜿蜒えんえんとつづいて、

「この世をしのび 身をしのび

兄君ゆるし たまいてよ………」

と三人は哀切きわまりないウラ声をはり上げるのであった。

私は毎晩のように女中部屋へ行ってはそんな話や歌を聞いて怯え、怯えるくせにまた行くのである。そして癩病になって眉毛のなくなった夢を見て泣いたりした。

それらの怖い病気はみな「バイキン」が運んでくるものである。

バイキンは口から入るもの、皮膚から染みこむもの、鼻から入るもの、いろいろある。

「バイキンでない病気は気狂いでっせ」

と物識りの女中がいった。学校へ行く途中に気狂いの奥さんがいる家があったが、それはバイキンによって罹る病気ではないから、家の前を息を詰めて走る必要はなかった。

ところで、「ノイローゼ」という病気は作家高見順たかみじゆんによって有名になったが、「躁鬱病そううつ」とい

う病氣は作家北杜夫きたもりおによってこのところ急に普遍化ふへんされて来たようである。北杜夫がこの病に罹かかって何年になるかよくわからないが、私たちは彼に会うと、

「今は何？ ウツ？ ソウ？」

と訊くのが挨拶代りになってしまった。躁鬱病あいさつとは、憂鬱ゆううつな時期と朗らかになる時期とが交互にやってくる病気で、鬱期ふさみのときは何をする気力もなく、人とも口を利きかずに閉じ籠こもっているが、いったん躁期うなに変わるや、人間が変わったように大はしゃぎ、人前で歌は歌う、浪花節ななわだしは唸うなる、ものは買いまくる、そして仕事もしまくるという状態になり、鬱期の収入減はこの期に容易に取り戻せるのだが、濫費らんぴの方も激しいので、差引きプラスになるのかマイナスになるのか、そのへんのところはよくわからない。困ることは鬱期と躁期の中間の、「普通の時」というのがあるのかないのか、あるとしても極めて短いらしいとのことで、私は「普通の時」の北さんにあまりお目にかかったことはないのである。いや、「普通の時」の北杜夫は極めてもの静かな紳士であるため、私のような粗暴な人間から見ると、鬱状態に見えるのかもしれない。

ところである日——今年の初夏の頃のことだ。遠藤周作えんどうしゅうさくから電話がかかってきた。

「おい、お願いがあるんやけどな、聞いてくれるか」

いきなりそういう。

「お願い？ なによ？」

私は警戒しながらいった。遠藤さんから神妙な声で「お願い」などといわれると、私は緊張せずにはいられない。

「十一月に神戸で樹座きざの公演をやるんだがな、それに出演してくれんか？ 頼むよ、出てくれ」樹座というのは遠藤さんが主宰している素人劇団である。一度だけ樹座の「カルメン」を見物したことがあるが、何ともこれは珍しいものであった。「熱演必ずしも佳かならず」という感想を人に与えるものであった。遠藤氏はそのとき、エスカミリオに扮して、ダミ声をはり上げて闘牛士の歌を歌った。何だかやたらに女にもてている場面であった。

マントを羽織り、金ピカの上着、白いストッキングがマントの下からヌウと出ているさまは、あたか恰も「西洋富山のマンキンタン」とでもいった格好で、

「うーん、さすが……座長だけあって花があるわ」

と私はいったが、花にも桜の花、菊の花からバナナの花までいろいろあるのである。

遠藤さんはその樹座公演「カルメン」に出演せよというのだ。

「いややウ」

と私は即座にいった。私にとって芝居なんてものはするよりも、観て、好き勝手、いいたい放題をいうところに面白さがあるものだ。何がよくて「好き勝手をいわれる立場、笑われる立場」に立たねばならぬのか。